



2018/8/1 和歌山市立西脇中学校

73年前の8月は…

6日に広島、9日に原爆が投下され、日本中の都市が空襲で焼かれ、日本は15日にポツダム宣言を受け入れ敗戦します。二度と戦争を起ささないように、今日は和歌山大空襲の体験談を読んでもらいたいと思います。



「父は、母の死体にすがりつき泣いた」

昭和20年7月当時、私たちは和歌山市十二番丁に住んでいた。この年の3月大阪で焼け出され和歌山に移り住んで3ヶ月が経っていた。家族は両親と兄（17歳）、長女・私（14歳）次女（12歳）、三女（7歳）、四女（3歳）、五女（9ヶ月）の8人で住んでいた。一番上の兄は兵隊に入っていた。その頃の連夜のサイレンに母はかなり疲れていた様子であった。

7月9日、夜8時か9時頃だった。警戒警報のサイレンが鳴った。まもなく空襲警報のサイレンにかわった。女の子はお城の下の壕へ避難するよう知らせがあったが、「どんなときも家族一緒に」との父の希望で、家族8人敷布団を頭からかぶり家を出た。戦前の和歌山の道は広々としていた。その広い道が逃げる人でいっぱいになっていた。焼夷弾がシュルーン、シュルーンと頭の上をかすめて降ってくる。私たちはできるだけ家々の軒下を小走りで逃げ回った。「和歌山城公園行こう」との父の声に公園を目指す途中で、布団に火がついてどうすることもできず捨ててしまった。8人は離れないように必死で、やっと西汀丁の旧県庁跡まで来た。もうこれ以上は先に行けない。今の経済センターの前の歩道には防空壕がいくつかあった。その壕に入れてもらおうとしたが、どれもみんないっぱいだった。最後の防空壕になんとか入ることができた。壕は両方から入り口があって、父は同じ入り口から入れず私たちの反対側にまわった。防空壕の中は人々でいっぱいだった。人の足が私たちの胸の上にくるようなこともあったり、私は幼い妹たちと母と壕の中で必死だった。兄は外の様子が見たくて入口に立っていたらしい。そこへ爆風がきた。兄は吹き飛ばされた。倒れた時、大きな石で頭を強く打ち、即死だった。そのうち、その辺りは火の海と化した。壕の入り口近くにいた母は、兄を見つけて気が狂ったように外へ出ていく。泣き叫ぶ私たちを振り切って、見向きもせず兄の所へ駆けよったのだろう。母も戻らなかった。壕の外には消防車が3台ほど並んでいた。それに火がつき、その火が風と一緒に壕の中を吹き抜ける。熱いし、人の足が胸の上にくるで苦しく、幼い妹たちと励まし合いながら、どのくらいの時間が経ったのかしら、私たちは生きていた。明け方一応火もおさまって

から父に会うことができた。でも、父は歩けない。壕の中に入れず入口付近にいた父は、爆風で飛んできた電柱にくるぶしをやられ骨折したのだった。「大変や、母と兄がいない。母が背負っていた9ヶ月の妹もいない」やっと夜が明けてきた。火の海もおさまっている。2人を探さねばと気がせいた。母のいとこ達が私たちを案内して野上から探しに来てくれた。その人に歩けなくなった父を和歌山城の下の木陰に連れて行ってもらい、それから私たちは母、兄、妹の3人を探しに手分けした。現在の商工会議所の地下に探しに行ってみた。中では頭から油をかけられたようにどす黒く光り着物もボロボロ、起き上がることもできず、「水をくれ、水をくれ」と息も絶え絶えにうめっている人の群れ。地下一面にそんな人たちが並べられているが、母と兄らしき人はいなかった。本当の私はもともと臆病者だったが、今は怖いなどと言てられなかった。

地上も死体の山であった。私は最初に入った防空壕のそばに戻った。「いてた！お母ちゃんや、兄ちゃんや」兄は黒こげで、手の指は半分しかない、足の指もない、仰向けの死体で、その兄と手をつなぐような格好で、うつぶせの母の死体が見つかったのだ。母も身に何もつけていなかった。私の頭の中は瞬間、空っぽになって涙なんて出ない。強いショックの中で夢中で父を呼びに走った。父も人の肩を借り、母や兄の横たわる場所へと急いだ。恥ずかしさを忘れ父は母の死体にすがりついて泣いた。私は呆然とその場に立ちつくしていたが、ふと、気づくと母に背負われていたはずの妹がいない。悲しむ間もなく、妹たちと砂の丸へ引き返し、よその人に抱かれた一番下の妹に出会った。お尻に火傷をしていたけれど生きていた。あの火の中をどうして逃げることもできたのか、妹を受け取り、お礼を言って別れた。これで家族全員の確認ができたが、母と兄は帰らぬ人となった。

私たち姉妹はまず天守閣の下へと身を寄せた。現在の博物館のある所は芝生で美しいけど、戦中は広場で兵隊たちが大きなお鍋でご飯を炊き、おにぎりを作って皆に配っていた。白いご飯に久しぶりにありついて、おいしかった。そんな間も敵機が飛んできては、機関銃で撃ってきた。おにぎりを食べながら木の陰へと逃げまどった。どのくらいの時間が経ったのか、父からの連絡で、私たちは西汀丁の父のところへと急いだ。山と積まれた死体の場所はもう整理され、小山のように土が盛られ塔婆が立てられてあった。「お母さんと兄ちゃんはこの柱の下に置いてく



和歌山城を中心に、焼かれた和歌山市。

れた」と父は言った。

私たちは手を合わせその場を後にした。今の経済センター裏のこ
んもりした芝生のある所が、その場所だったが、久しく行くことができ
ず、何年か経ってお参りした時は、現在の供養塔の場所になって
いた。これで良いのかと少々驚いた。それから子ども心に不思議に
思ったことがある。それは私たちが母や兄を血まなこで探し回ってい
る時、兵隊が県庁前から市役所前の方へと歩いているのに出会った。私たちを守ってくれるはずの兵隊が、服も
きれいだし、ケガもしていない。どうしてだろう。何をしていたんだろうと、その時とても不思議で納得がいかなかった
のを今も覚えている。

それから野上へ行って、一晩お世話になることになった。やっと家に落ち着いたが、昨日まで母に甘えていた私
は、今日から母の代わりをしなければならない。その夜、一番末の妹はお尻のやけどが痛いのと、母がいないのと、
お腹が空いているので泣き通した。私も泣きながら妹を背負ったままで、一夜を明かした。父は動けない。妹た
ち4人は幼い。14歳の私はこれからどうすればいいの……。

それから3年後、父は脳卒中で母の後を追うように死んだ。

私たち姉妹は父のいとこの家へ、母の弟の家とちりぢりにお世話になり、それぞれの運命をたどった。でも今は
皆家庭を持ち、一応家もある。人並みの生活を守って生きている。たまに会えば楽しい話もする。しかし父が生
きていれば英語を教えてもらったのに、母が生きていれば生活を教えるも学べたのと思う時もある。



みぎわちようこうえん 汀丁公園の供養塔